（M S 明朝）　記載例　　前鳥取県体育協会史ｐ335

　　バスケットボール協会

　　国体の常連、鳥取クラブ

　バスケットボールは、県連盟の発足で戦後間もなしに復活したが、その中心となったのは、戦前に活躍した鳥取師範、鳥取一中、鳥取二中などのOBたちだった。このころ鳥取市では米進駐軍との交歓試合や全鳥取（鳥取クラブ）－全島根などの熱戦が展開され、観戦する後輩やファンによい手本と刺激を与えていた。また市内を二分した鳥取一中、鳥取二中のOB・現役戦も対抗意識で白熱し、昭和20年代前半期に鳥取のバスケとボールが全国レベルを維持する原動力となった。その最高の金字塔は、旧制中－新制高の鳥取勢が第1回国体にベスト・8のあと、第3－5回国体（当時は兼インタハイ）で連続3年間もベスト・4に勝ち進んだことであり。全国制覇の偉業も決して夢物語ではなかった。

　好ライバル鳥東と鳥西　まず、その高校界では、昭和21年に初めて開かれた国民体育大会に、当時の旧制中学男子は中国地区を勝ち抜いた鳥取二中が出場した。２戦目の準々決勝で、優勝した東京・墨田工に３点差の惜敗で、全国レベルの力量を発揮した。メンバーは高松繁太郎、山根秀治、田中寛舒、田中三郎、井中弘治らである。また同年、早くも関西師範・青年師範大会が開催され、決勝戦で、鳥取師範と鳥取青年師範の県勢同士が対決、鳥取青年師範が勝利を収めた。メンバーは鳥取青師が河崎孝夫、山口雄造、小沢潔、名子平孝幸、谷口守、山口武男。鳥取師範が重山幸人、岸本正弘、足立進、民木康三郎、三谷昭夫、米村淳一らだった。翌22年の西日本中等学校大会では鳥取一中が優勝。第２回石川国体は男子に鳥取一中、女子に鳥取高女が出場した。

　23年春から新制高校となり、第３回福岡国体で男子の鳥取二中（現鳥取東高）が準決勝に進出して惜敗、安東健彦、井上雄吉、奥山善雄、上田陽一、松本紀行らのメンバーが検討した。女子は鳥取三高（旧鳥取高女、現鳥取西高）が連続出場。第４回東京国体でも鳥取西高が堂々３位だったが、この24年には学区制施行があって旧二高の精鋭が合体し、初の全国制覇を達成する好機とみられていただけに惜しまれた。のちオリンピック候補にあがる山口誠太郎をエースに高取淳雄、上田陽一、松本紀行、小倉礼次郎、西尾喜胤、浅井篤志、早島和一之ら重厚なメンバーであり、西日本大会でも準優勝を獲得している。女子代表には倉吉高（現倉吉西高）がとって代わった。続く第５回愛知国体は、男子は鳥取東高が鳥取県勢３年連続の準決勝進出を成し遂げ、女子も連続出場の倉吉高が秋下潤子、向井明子らの好選手をそろえて３回戦進出を果たし、優勝チームの東京・お茶の水女高と善戦した。鳥取東港のメンバーは佐々木昭郎、中原敏晴、俵謹一、吉田多聞、藤田学、中江敏夫らで、このとき２年生の藤田は明治大、日本鋼管へと進んで成長、メルボルンオリンピックの日本代表に選ばれた。

　第５回西日本高校選手権大会が鳥取市内で26年１月５日から４日間、日進小学校を主会場に男子46校、女子30校の参加で開かれ、男子の鳥取西は準決勝まで勝ち進んで地元ファンを喜ばせた。

26年には国体と切り離して全日本高校選手権（インタハイ）が、８月に名古屋で単独開催となった。その初の大会には男子は鳥取東高、女子は鳥取西高が県代表を占めたが、秋の広島国体は鳥取東高がアベック出場した。翌27年の男子は鳥取西高が全日本、第７回福島国体（中国代表）とも独占し、女子は逆に鳥取東高が圧倒的な強さで全日本出場。このように鳥取東高と鳥取西高は猛烈に競って全国舞台を踏んだ好ライバルで、ともに好成績をあげた。これは指導者の努力によるところが大きく、鳥取東高に25年まで三好喬、鳥取西高に早川竹義がいて研さんした。皮肉なことに、それぞれの出身校が三好は鳥取一中、早川は鳥取二中であり、お互いに自分のライバル校の監督、といういわく付きであった。

　（写真はイメージです。　　24字×10行=240字分）

